

特集：片山廣子と東洋英和

東洋英和の宝 “廣子とみね子”

与那覇 恵子

月の夜や何とはなしに眺むれば
わがたましひの羽の音する

ことわりも教も知らず恐れなく
おもひのままに生きて死なばや

あはれとも憐むことの罪ならば
我に罪あり神にも恥ぢず

我が世にもつくづくあきぬ海賊の
船など来たれ胸さわがしに

花鳥風月のこじんまりとした日本的情緒に収まりきらない、大きな魂の存在を感じさせるこれらの歌を詠んだ歌人片山廣子は、東洋英和女学校の出身である。もっとも廣子が英和で学んだのは120年も前のことになる。

歌人片山廣子は、翻訳家松村みね子でもある。鶴岡真弓氏はその二面性を「それはいつも双片で鳴る、一体の鈴。あるいは二重の色を抱いた、ひとつの花」（『解説 ひるがえる二色 廣子とみね子』『燈火節』月曜社・2004年11月）と美しい言葉で表現し、「日本という国の近代に、『日本語』という言葉のたゆたいを詠歌と外国文学との繕り糸によって織りとおした女性だった」と述べた。詩歌の創作と翻訳行為を通して日本語表現に新しい息吹をもたらし、日本語の可能性をひろげた女性として高く評価している。

「近代短歌史上類例の少い静謐にして孤独、



高貴にして率直誠実な靈魂のひびき」（藤田福夫「片山廣子の二歌集と年譜」「心の花」1966年1月）を伝えていたが故に明治・大正期の日本歌壇で正当に評価されなかった廣子。「アイルランドという国の文学を本格的に本邦に紹介する先駆的日本人」（鶴岡真弓前出）でありながら一部の人にしか知られていなかったみね子。“英和の宝。”ともいうべき「廣子/みね子」を、廣子とみね子の文学的足跡と彼女について語った多くの人々の言葉から素描してみたい。

東洋英和での学び

廣子は1878（明治11）年2月10日に、父吉田二郎と母がんの長女として東京麻布に生まれた。父はのちにイギリス総領事を勤めた外交官であった。7歳の頃に東洋英和女学校に入学するが、自宅から学校まで一キロ余りの距離にも関わらず廣子は寄宿舎に入っている。この寄宿舎生活は宗教的にも文学的にも彼女に大きな影響を与えた。



七十代になって折々に書き留めた文章を纏め、第3回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞したエッセイ集『燈火節』（暮しの手帖社・1953年）の中の一編「身についたもの」に、当時の寄宿舎生活の一端を伺うことができる。

私は小学生の年から女学校の寄宿舎にはいつてゐて、大きくなると（十四五から）自分の部屋のお掃除を習はせられた。それから十六位からは、外人教師のお部屋と西洋応接間の掃除をした。一週に一度づつは足袋や肌着の洗濯もしなければならなかつた。こんな年になつても割合にらかな気持ちで掃除や洗濯ができるのは、十代でおぼえた仕事が、芸ではないが、身についてゐるのであろう。

（略）

さて料理や洗濯とはよほど方角ちがひの物に聖書がある。私には深いなじみのもので、おそらく私の体臭の一部ともなつてゐるだらう。ミツシヨンの女学校だからとはいへ、聖書は教へられ過ぎたやうだ。日曜日の午前は教会に行き牧師さんのお説教を聞いた。そのお説教の前に聖書が朗読されてその中の一節を当日の説教の題とされる。それから教会でなく学校の方に日曜学校といふのがあり、英語の聖書で旧約のユダヤの歴史を教へられた。先生の教へ方によつてはずるぶん興味ある学課であつた。これは試験はない。それか

ら週間の日の月火木金の四日、午前十一時半から十二時まで校長先生の新約聖書の研究があつた。研究といつても一方的で、校長さんは文学が好きの人であつたから、いろいろな詩人の詩やシェークスピアの劇の文句まで引いて聖書をたいへんおもしろく教へて下さるのだつた。これは試験があつて、よほどうまく答案を書かないとあぶない、聖書の点数を落第点なぞ貰つたら、ミツシヨンの方面にはスキヤンダルみたいな一大事なのである。

それから又、そんな義務や義理でなく、私たち生徒が何も読む物のないとき、聖書でも、読まないよりは読む方が愉快かつた。

英和での学びは、人として日常生活を送る基本的な掃除や洗濯とともに精神を鍛える場でもあつたらう。五十余年過ぎてなお「長時間の読書が何かやくに立つたかと考へれば、むろん心の持ち方にも、身の行ひにも、それだけ若い時に蒔かれた種子は育つて実を結んだにはちがひない」と語れる由縁である。

文学の学びについては『東洋英和女学校五十年史』（1934年）の、校長先生「ミス・マンローのこと」に「先生は文学を愛好され、詩が殊にお好きのやうでした。『英文学』といふ時間の二年のあいだに教へていただいたのは、シエリイの『西風の譜』『プロミシウス、アンバオンド』またバアンズの『野菊に』『ねずみ』などで、ことにお好きで長時間を割いて下さつたのは、ブライアントの『曠野』の詩でした。何十年を隔てた今でも、草野をはしる風の音を先生のお声のなかに思ひ起します」と記されており、身体的に文学が享受されたことが分かる。さらに西洋風の女子教育熱が衰えて、花嫁修業らしき教育が流行っていた時期、時流に逆らうかのような先生の奮闘をいつも思い出して「心にお礼を申す」と述べている。

クリスチャンにはならなかつたけれどキリスト教的教養、屹立した孤高の精神、後に翻訳家として名をなす知識は英和で培われたといえるかもしれない。

むかしわれ神の教を学びつる
麻布のすみの灰色の家

「灰色の家」とは創立当初の東洋英和のことである。廣子の後輩にあたる児童文学者で『赤毛のアン』の翻訳でも著名な村岡花子は「東洋英和女学院東光会会報」（1962年4月）に、母校東洋英和は「私がいた時分はかなり大きくなってはいたけれども、やはり、二階と三階が寄宿舎で一階が教会であった。」「ささやかな学校であった。けれども『灰色の家』で学んだ多くの人々が日本の国の文化につくした功績は大きい。初代の卒業生の強い感化は今なお、生きており、この後も永久に生きることであろう」と書いている。

村岡は「忘れ得ぬ人々」（「東光」1957年12月）でも、聖書の学びと切り結んだ廣子の歌の反骨精神を取り上げている。

四十年砂漠のなかに住みけりと
読みしは古きよそぐにのこと

山にのぼり約束の国のぞみ見て
息たえけりと書には書けり

戦時中に「砂漠のなかに住みけり」「息たえけり」と詠むことは恐らく不謹慎であったろう。村岡は、出埃^{エジプト}及記のイスラエル民族の運命に日本国民の行く末を重ねた、時勢に迎合しない廣子の歌を「日本短歌の歴史の上に



廣子が「灰色の家」と詠んだ東洋英和女学校校舎

記憶されていていいことのように私には思われる」と述べている。村岡の指摘する角度からも廣子の歌はもっと取り上げられてよいと思う。

^{かわせみ}
『翡翠』の世界

廣子が短歌の世界に入ったのは東洋英和を卒業した18歳の頃である。英和の同級生で、寄宿舎も一緒だった新見かよ子と佐佐木信綱の竹柏門下に入り、「歌のおけいこや源氏物語のお講義を伺ふため」に週一度ずつ通ったという。1898（明治31）年に竹柏会を中心にした雑誌「こころの華」（後に「心の花」と改題）が創刊される。「心の花」には正岡子規、伊藤左千夫、坪内逍遙、森鷗外など、錚錚たる文学者が執筆、寄稿している。短歌に限らない総合文芸誌の趣があった。

廣子は一号から吉田姓で歌を載せている。廣子が大蔵省勤務であった片山貞次郎と結婚したのが21歳の時で、1900年からは片山廣子の名で短歌や随筆、詩を発表していく。22歳で長男達吉を出産した後も、ほとんど毎号に書いている。

竹柏会は雑誌と並行して「心の花叢書」として歌集をも出していた。廣子が第一歌集『翡翠』（竹柏会出版部）を刊行したのは、信綱に師事して20年後の1916年3月である。廣子38歳、300首の歌が収められた。

『翡翠』の扉には、既にアメリカ、イギリスで英詩集を出版し英詩人としても名高かった野口米次郎ことヨネ・ノグチの「歌集翡翠の出版せらるゝにあたりて片山夫人に與ふ」が英文と日本語で綴られている。詩的ともいえる言葉で野口は、「むかしの歌」はすでに「灰燼」となり、今私たちは「廢墟の上に新しき歌を再び築か」なければならぬと謳う。最後の一節は“I believe you too stand upon the ruins lone and sad.,（吾は信ず、君も亦寂しく悲しき廢墟の上に立てりと）、となっており廣子は言葉の革新を目指す同志として認識されている。野口はすでに翻訳を手がけていた廣子の言葉にも注目していたと考えら

れる。英文の序が付けられているのも廣子らしいといえる。

野口の序の後に佐佐木信綱の言葉が続く。その中に信綱は、廣子自身が語った言葉として次のような言葉を書き止めている。

「自分の歌は、たくみを捨てて、事物をありのままに感じたものでありたい。そして其感じを普通の人と共に分つものでありたい。其ためには、美しい狭い詩歌の境を未練気なく離れなければならない。(略)併しながら、この翡翠の歌の中には、現在のこの見地を目標として見れば、捨てなければならないものも沢山ある。それを捨てなかつたのは、たとへ多少のたくみの交つた作であつても、狂熱と理智との争の濃き陰影を印して居る点に於いて、最も強く自分を現はしたもので、自分の身の半身の如くなつつかしく思はれたからである。覚めんとして覚め得ざる心の姿、真面目なる女の内的生活の記録の一片、新しき道にいつる記念」

「美しい狭い詩歌の境」に止まった歌であるのか。信綱自身は評価を読者に委ねている。詠み人の心のゆれを表す歌を、次に挙げておこう。

女てふ迷ひの国を三十路ほど
あゆみあゆみて踏みしほそみち

何を待つ今何を待つ山際の
ほのあかるみに笛遠く鳴る

よろこびかのぞみか我にふと来る
翡翠の羽のかろきはばたき

『翡翠』の書評で興味深いのは、後に廣子と親交を持つようになる芥川龍之介の「唾苦陀」と署名した「新思潮」(1916年6月)に載ったものである。「表現の形式内容二つながら、この作者は、まだ幼稚である。しかし易きを去つて難きに就いたと云ふ事は、少くとも作

者自身にとって、意味のある事に相違ない」「この歌集が、他の心の花叢書と撰を異じする所には、此処に存するのではないか」と書いている。ある枠を超えようとする意志を、芥川は廣子の歌に感じているといえないだろうか。

芥川が廣子と出会ったのは1924(大正13)年の夏、軽井沢である。廣子は芥川に強烈な印象を残したようで、1927年の『三つのなぜ』に書かれたシバの女王は廣子で、ソロモンは芥川だという指摘がある。

シバの女王は美人ではなかつた。のみならず彼よりも年をとっていた。しかし珍しい才女だつた。ソロモンは彼の女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。

さらに芥川の遺稿『或阿呆の一生』の中の「越し人」に描かれる「才女」も廣子であると言われている。全文は次の通りである。

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か気の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の
何かは道に落ちざらん
わが名はいかで惜しむべき
惜しむは君が名のみとよ。

遺稿に「自伝的エスキス」という割注が付されていたということから「越し人」は廣子と芥川の“叶わぬ恋”、“忍ぶ恋”を表現したものとされ、真偽定かでない恋物語の神話が語られてきた。

二人が出会った頃、芥川32歳、廣子は46歳。廣子の夫はすでに4年前に病死していた。共に芥川と会った娘總子は17歳であった。軽井沢では堀辰雄や室生犀星とも交流があり、堀の『聖家族』に登場する細木夫人とその娘絹子は、廣子と總子がモデルといわれている。

姦通罪があった頃の危険な恋。阿部光子氏による伝記「ひとつの樹かげ」（『その微笑の中に』新潮社・1992年）や、川村湊氏の評伝『物語の娘 宗瑛を探して』（講談社・2005年）には、精神的な恋の行方が詳しく捉えられている。ちなみに宗瑛は總子のペンネームである。

翻訳の世界

廣子の最初の翻訳、ミラー「自然の美」が「心の花」に掲載されたのは1901年、23歳の時である。折に触れて翻訳は続けられていたが、松村みね子というペンネームを用いて本格的に開始したのは35歳の頃、鈴木大拙夫人ビアトリスの指導を受けてからといわれる。ペンネームの由来は、廣子が雨の日の電車で向かい側に座っていた少女の洋傘にその名を認め、とても美しいと感じて借用した、と伝えられている。以来「松村みね子」の名はアイルランド文学の翻訳者として文学史に名を残すことになった。

松村みね子の筆名で初めてレディ・グレゴリー「満月」を「心の花」（1914年）に載せた後、ペイン、タゴール、ショウ、シングの訳を次々に掲載していく。廣子の翻訳は当時から好評であった。東洋英和で培った英語力もあっただろうが、井村君江氏は「疑問の点は外国人のみならず本国の学者や専門家に質問して正確を期す努力」（『解題』『かなしき女王』ちくま文庫・2005年）の賜物であったと述べている。

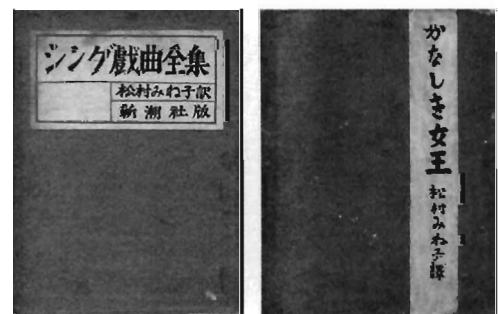
明治のすぐれた文学者であり翻訳家でもあった上田敏も「松村夫人の翻訳」（「心の花」1915年10月）で、「松村夫人の翻訳振には、さきに此誌上で、レデエ・グレゴリーの『満月』を読んだ時、感服して了った。愛蘭風の英語はあゝ読み碎してあゝいふ形に再現するのが適当であらう、それにしまづ原曲の選択といひ、翻訳の後に潜む非凡の読書力といひ、奥床しい事だと思つてゐるうち、またタゴアの抒情詩抄訳を見て、更に敬服の度を加へた。この翻訳は詩人タゴアの最も早い紹介の一

つだが、同時にまた最も永く残るべきものであらう」と、絶賛している。

またバーナード・ショウ原作『船長プラスバオンドの改宗』（1915年）には、森鷗外の「私はこれまで多くの人が多くの人西洋脚本を訳したのを読みました。（略）それを読みつつ、いつも心の内で『まづいなあ』と思ふのです。『おれならかうは書かない』と思ふのです。それが私の癖になってゐます。/然るに此本はどこまで読んで行つても、その『まづいなあ』を出せないのです。とうとう出さずじまひになつて（略）私はescapeを得ずに、此本に捕らへられてしまつたのです」と書かれた「序」が付いている。

原文を損なわない的確な日本語でシング『いたづらもの』（1917年）、『ダンセニイ戯曲全集』（1921年）、『愛蘭戯曲集』（1922年）、『シング戯曲全集』（1923年）、フィオナ・マクラウド『かなしき女王』（1925年）を刊行していく。菊池寛は「文壇交遊録」（1935年）で、「日本婦人中もつとも学識ある婦人なり」と称賛している。

村岡花子は、良き原作を選ぶのに貴重な助言を得たこと、「王子と乞食」の訳を勧めてくれたのもみね子夫人だと書いている。廣子は童話『四人のお坊さん』や小説『赤い花』なども発表している。



“野に住みて。”の廣子

精力的に作歌、翻訳をこなしてきた廣子は、1927年の読売新聞のインタビューに「もう翻訳の松村みね子は、年をとつたので廃業しようかと思つてゐます」と答え、仕事の量を減

らしていく。阿部光子氏や川村湊氏は、この年自殺した芥川の死と関連があると捉えている。

旧伯爵渡邊千春の未亡人とめ子に勧めて創刊(28年10月)させた女性だけの同人雑誌「火の鳥」にも、結局数ヶ月しか関わらなかった。「急に自分の生活に疲れを感じて何もかもいやになって」「文筆の仕事ばかりでなく、外に出ることも面倒」(『燈火節』『あとがき』)になっていったらしい。さらに太平洋戦争で、

あまざかるアイルランドの詩人らを
はらからと思ひしわが夢は消えぬ

状態になっていった。終戦の年には長男も喪っている。

くりおつるみねのほそみちゆきかへり
にがくうれしもひとりなること

多くの愛する人を失った悲しみを乗り越えた後の境地とでもいえようか。ようやく自らペンを持つ気になったのは七十代に入ってからである。1952年にアイルランド伝説集『カッパのクー』を、翌年『燈火節』とイエーツ『鷹の井戸』を刊行し、'54年1月には『翡翠』以降36年間の歌を収めた『野に住みて』(第二書房)を上梓する。76歳の年であった。



復刻版(角川書店・1989年)

『野に住みて』には夫の死、芥川との出会いと別れ、戦争、息子の死、そして一人暮らしの生活と、その時代時代の心境が静謐に時にはユーモアを込めて歌われている。

待つといふ一つのことを教へられ
われ髪しろき老に入るなり

生きるかひあるかと問はじ天地の
一つの生命をわれ今日も愛す

ひとりゐてトーストたべるわが姿
ひとよ見るなど思ひつつをかし

久松潜一は、「私には技術を越えた作品であると感じた。技術を越えたといふのは技術がないのではなく、技術を通りこしたといふ意味である。(略)平易な詞と日常的な素材によつて淡々と歌いこなされてゐる、それでゐて読んで深い感動を覚えたのは、技術を越えた人間性の深さにあると言へるのであろうか。技術と人間性とが一になつてしまつたとも言へる。さうして人間性といふ点から言へば、感情の鋭さも抑へられ、知性のひらめきも枯淡となつてよき意味の老境の文学となつてゐる。それでゐて決して固定しないみづみづしさがある」(『野に住みて』を讀みて)「心の花」1954年10月)と称えた。

阿部光子氏によると臥してなお横文字を讀んでいたというが、1957(昭和32)年3月19日、79歳の生涯を閉じた。

廣子研究の第一人者である藤田福夫氏はその才能に比して「必ずしも正当な評価を与えられていないのは遺憾」(「片山広子の作風概観ならびに年譜」「金沢大学教育学部研究紀要」1965年12月)と憤慨されている。清部千鶴子氏は「竹柏会の女流歌人として、卓越した存在であったのに、歌壇に拠って立つことを好まず、高踏派というのではないが、敢て歌壇に遠く身を置き、最期まで孤高を保った姿勢に深く打たれ」、『片山廣子—孤高の歌人』(短歌新聞社・1997年)を著した。

今年4月には全歌業を集成した『野に住みて』(月曜社)も刊行された。“東洋英和の宝。”を讀み続けていきたいと思う。

(大学教授)

東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」について

保坂綾子

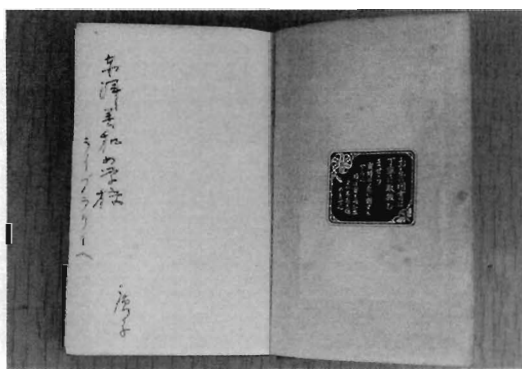
中高部の図書室には「片山廣子氏寄贈本」として伝えられてきた一群の図書がある。片山廣子は1878（明治11）年麻布三河台に生れ、東洋英和女学校に学んだ。学院に残る“List of Graduates and New Pupils”によれば、1894年に邦語科・英語科とも卒業している。その後ほとんどなくして国文学者で歌人の佐佐木信綱の門下に入り、彼の主催する竹柏会の歌人としてその才能を発揮した。また、廣子は松村みね子の筆名で、イェーツやシングなどのアイルランド文学の翻訳者としても著名な人物である。今回の「史料室だより」片山廣子特集に際し、調査の機会を得たのでここに紹介したい。

「寄贈本」の概要は9頁の一覧の通りである。受け入れのいきさつを語る当時の記録が残っていないのが残念であるが、片山廣子自身が生前に寄贈したものと、1957（昭和32）年逝去の後、ご遺族により学院に贈られたものとに分けられるようである。前者には廣子の署名献辞入りの貴重なものもあるが、「寄贈本」の大部分を占めるのは後者である。その多くには端正な文字の「片山蔵書」印が押されており、確かに廣子の手元におかれていた本であることを物語っている。

これら「寄贈本」にはそれぞれ「東洋英和女学院図書館之印」「東洋英和女学院高等部蔵書」といった数種の蔵書印が押されている。このことからわかるように、これらはかつて中高部の図書室、主に高等部図書室に置かれ、学校図書として生徒達に活用されてきた。その後（1980年代前半頃）、一連の「寄贈本」が非常に資料的価値の高いものであるとの判断から、一般貸出には供せず貴重書として保管されることとなり、現在に至っている。この一群の図書は、片山廣子から母校へ贈られたという来歴はもとより、近代における著名な文人の蔵書であったということからも、文学史の上で大変興味深い存在である。今後も学院の財産として大切に受け継いでいきたい。

「寄贈本」をあらためて見てみると、文壇のそうした人物の著作や翻訳作品が並ぶ。佐佐木信綱、芥川龍之介、堀辰雄、與謝野晶子、川田順らの著作や歌集、堀口大學、森林太郎（鷗外）の翻訳作品など、挙げればきりがない。なかには片山廣子へあてた著者署名入りの本もあり、歌人・文学者として歩んだ廣子の交友関係を垣間見るようである。

以下に「寄贈本」の一部をとりあげてみたい。



『鶯翠』 1916（大正5）年刊（竹柏会出版部）

“心の華叢書”の一冊として刊行されたもので、片山廣子の第一歌集。図書室の蔵書印に「昭和8年9月12日」の日付が確認でき、生前に廣子自身が寄贈したものであることがわかる。ちょうど廣子が『東洋英和女学校五十年史』の編纂委員として母校に関わっていたところに寄贈されたものか。

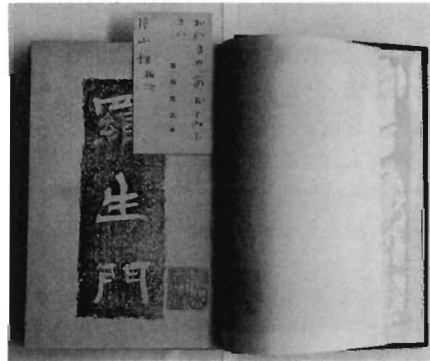
「むかしわれ神の教を学びつる麻布のすみの灰色の家」はこのなかの一首。



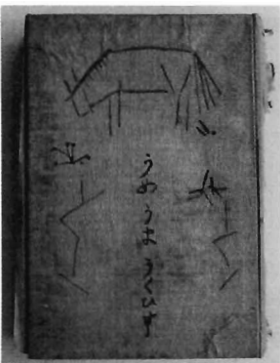
『ある老歌人の思ひ出』1953（昭和28）年刊（朝日新聞社）
佐佐木信綱の自伝。表紙には「片山ぬしへ 昭和廿八年
十月廿九日 信綱」とある。



『太陽と薔薇』1921（大正10）年刊（アルス）
與謝野晶子の歌集。「寄贈本」の中には、晶子の著作が数冊ある。これはそのうちの1冊。署名入りで廣子に献じられた歌集。



『羅生門』1917（大正6）年刊（阿蘭陀書房） 芥川龍之介による初期の短編小説。



『梅・馬・鷲』1926（大正15）年刊（新潮社） 芥川龍之介の隨筆集。

芥川龍之介から廣子へ贈られた著作のうちの二冊。晩年に「才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」（『或阿呆の一生』）と評するほど、廣子の才能を高く評価していた芥川は、署名入りで数冊の本を廣子に献じている。この『羅生門』は発行年からすると交流が始まって間もないころ芥川から廣子に贈られたものと思われ、「おひまの節およみ下さい」と書かれた名刺が添えられている。

東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」一覧

書名	著者・編者〔訳者〕	発行	発行年月日	特記事項	片山印
現代短歌全集 第十九巻	平野萬里(著者代表)	改造社	1931(S6).9.15		○
現代短歌体系 第二巻	小泉基三 編	河出書房	1952(S27).4.30		○
かなしき女王 (フィオナ・マクラオド短編集)	フィオナ・マクラオド〔松村みね子訳〕	第一書房	1925(T14).3.15		○
ダンセニイ戯曲全集	ダンセニイ〔松村みね子訳〕	警醒社書店	1921(T10).11.3		○
羅生門	芥川龍之介	阿蘭陀書房	1917(T6).5.13	献辞入りの名刺	○
影燈籠	芥川龍之介	春陽堂	1920(T9).1.28		○
春服	芥川龍之介	春陽堂	1923(T12).5.23(第4版)		○
黄雀風	芥川龍之介	新潮社	1924(T13).7.18	献辞・署名入	○
百神	芥川龍之介	新潮社	1924(T13).9.17	献辞・署名入	○
支那遊記	芥川龍之介	改造社	1925(T14).11.3		○
梅・馬・鶯 (芥川龍之介隨筆集)	芥川龍之介	新潮社	1926(T15).12.25	献辞・署名入	○
牡丹のある家	窪川稲子	中央公論社	1934(S9).8.3	献辞・署名入	○
雉子日記	堀辰雄	河出書房	1940(S15).7.9		○
晩夏	堀辰雄	甲鳥書林	1941(S16).9.20	献辞・署名入	○
風立ちぬ (堀辰雄作品集第三)	堀辰雄	角川書店	1946(S21).11.20		○
繪はがき (堀辰雄小品集)	堀辰雄	角川書店	1946(S21).7.21	献辞・署名入	○
美しい村 (堀辰雄作品集)	堀辰雄	角川書店	1948(S23).10.30		○
薔薇 (堀辰雄小品集 別冊)	堀辰雄	角川書店	1951(S26).6.15		○
夢之華	與謝野晶子	金尾文淵堂	1906(M39).9.5		○
常夏	與謝野晶子	大倉書店	1908(M41).7.10		○
青海波	與謝野晶子	有朋館	1912(M45).1.23		○
歌集 太陽と薔薇	與謝野晶子	アルス	1921(T10).1.10	献辞・署名入	○
白櫻集(遺歌集)	與謝野晶子	改造社	1942(S17).9.5		○
日本古典全集 第二回 徒然神	與謝野寛・正京敦夫・與謝野晶子 編	日本古典全集刊行会	1926(S1).12.31		○
グウルモンの言葉	グウルモン〔堀口大學訳〕	第一書房	1931(S6).9.17	献辞・署名入	○
ゾフエト紀行修正	アンドレ・ジッド〔小松清訳〕	第一書房	1937(S12).11.10		○
ゾフエト旅行記	アンドレ・ジッド〔小松清訳〕	第一書房	1937(S12).3.20		○
定本 吉野朝の悲歌	川田順	第一書房	1939(S14).9.20		○
川田順全集	川田順	中央公論社	1952(S27).6.10	署名入	○
歌集 文人書風	日夏歌之介	関書院	1947(S22).8.25	献辞・署名入	○
ある老歌人の思ひ出 自伝と交友の面影	佐佐木信綱	朝日新聞社	1953(S28).10.25	献辞・署名入	○
隨筆 新雪集	水原秋櫻子	第一書房	1939(S14).1.25		○
三代 俳句鑑賞 春夏の巻	水原秋櫻子	第一書房	1942(S17).10.20		○
立山群峯	冠松次郎	第一書房	1929(S4).6.1(第2版)		○
黒部	冠松次郎	第一書房	1930(S5).5.18		○
高瀬川	高倉輝	ロゴス書院	1930(S5).11.20		○
編纂者の発言	池島信平	暮しの手帖社	1955(S30).2.20		○
八雲 第2輯	川端康成 他 編	小山書店	1943(S18).6.15		○
歌集 春の碑	三好達治	創元社	1939(S14).4.5		○
(紅葉山人遺稿)蕉門十哲句選 他	尾崎紅葉 選	国民書院	1904(M37).10.21		○
戀愛名歌集	萩原朔太郎 選評	第一書房	1931(S6).5.15		○
黄金杯	J.ワッサーマン〔森林太郎訳〕	春陽堂	1910(M43).1.1		○
日本藝能史六講	折口信夫	三教書院	1944(S19).3.10		○
石川啄木(現代叢書39)	兼常清佐	三笠書房	1943(S18).8.15		○
天皇歌集 みやまきりしま		毎日新聞社	1951(S26).11.3		○
寫生文集 朝立貝	阪本四方太・高濱清	俳書堂	1906(M39).3.25		○
藤蔭冊子	上田秋成(宮崎三昧校訂)	日吉丸書房	1909(M42).4.8		○
新萬葉集 第二・五・六・八巻	改造社編	改造社	1938(S13).3.27~8.20		○
巴里と東京	福島慶子	暮しの手帖社	1951(S26).6.10		○
小歌論(アララギ叢書第110編)	野藤茂吉	第一書房	1943(S18).12.20		○
有史以前の日本	鳥居龍藏	磯部甲陽堂	1918(T7).7.20		○
随片	ノヴァーリス〔飯田安訳〕	第一書房	1931(S6).12.26		○
微生物を追う人々	ホルド・クライブ〔秋元壽恵夫訳〕	第一書房	1942(S17).4.20		○
近代劇全集 全43巻(欠本1)・別巻1		第一書房	1927(S2)~1930(S5)		○
夢十夜	夏目漱石	春陽堂	1924(T13).3.15(第82版)		○
堤中納言集		東京美術書院	1926(T15).11.25		○
古今倭歌集 巻第八		晩翠軒	1927(S2).4.8		○
良寛遺墨集	安田毅彦 監修	第一書房	1928(S3).11.15		○
老子解説	北村佳逸	立命館出版部	1933(S8).11.20		○
金鈴餘響	佐佐木信綱 編	竹柏堂	1937(S12).6.13		○
古今和歌集 巻第十七		鳩屋堂	1940(S15).9.5		○
市川左団次	松居桃楼 編	高橋登美	1941(S16).2.23		○
尚古法帖 第十八(版本)	行成卿				○
歌集 翡翠	片山廣子	竹栢会出版部	1916(T5).3.25	献辞・署名入	○
キリスト聖語読本	佐野勝也	第一書房	1937(S12).10.15		○
大徳 第三部	パールバック〔新居格訳〕	第一書房	1939(S14).8.10		○
堀辰雄(日本文学アルバム4)	中村真一郎 編集	筑摩書房	1954(S29).9.28		○
義眼殺人事件	S.ガードナー〔祐一郎訳〕	早川書房	1956(S31).2.15		○
赤毛館の秘密(探偵小説文庫)	A.A.ミルン〔大門一男訳〕	新潮社	1956(S31).4.29		○

この一覧は中高部図書室「片山広子氏寄贈図書」リスト及び史料室「片山広子氏よりの寄贈本」リストを参考に作成した。「発行年月日」欄に特に記載がない場合は初版本。また「片山印」欄の○は「片山蔵書」と刻まれた蔵書印が押されている本であることを示している。

なお、本学院に寄贈された片山廣子の蔵書は翻訳作品を含め和文のものである。廣子の蔵書のうち洋書は松村みね子名義で日本女子大学図書館へ寄贈されている。

*今回ご紹介しました「片山廣子氏寄贈本」は、2006年12月に中高部図書室より学院史料室へ保管が引き継がれる予定です。

今後も大切な資料として保存・利用してきたいと思っております。

〈思い出の先生がた〉 12

MISS BLACKMORE AND THE ROGERS FAMILY

Daphne Rogers

Daphne Rogers

My parents first met Miss Blackmore in 1926 when they went as a newly married couple to the harbour town of Yarmouth, Nova Scotia. My father became minister of Central United Church there.

My mother was a very young bride, not much older than Miss Blackmore's former students at Toyo Eiwa. Miss Blackmore had recently retired and had come to live in Yarmouth. She attended Central United Church and supported Mother most kindly. The young bride was now far away from her parents and her siblings who lived in western Canada. Mother told me how much she appreciated Miss Blackmore and how she felt that Miss Blackmore understood how the young minister's wife must be feeling in such circumstances. This led to a very happy life in Yarmouth. Miss Blackmore's advice and friendship meant a great deal to Mother.

During the next few years my sister and I, followed by our brother, were born. Miss Blackmore continued to be interested in and very kind to our family. The first gift I remember coming from another country was a beautiful Japanese doll, dressed in a beautiful kimono. In our home there was also traditional Japanese cloth, dyed in bright colours. I was happy to leave a piece at Toyo Eiwa when I retired and I have a table cloth which I treasure.

Miss Blackmore was active in the church. There was co-operation with my father and the members of the church.

The town was small with a population of only a few thousand people, so everybody knew each other. They enjoyed not only church but social functions as well. After several years my father accepted an invitation to

become minister in another town, so we did not see Miss Blackmore much but there were always happy memories of the days in Yarmouth.

(元学院宣教師・元小学部／中高部教諭)



ミス・ブラックモア略歴 (Isabella Slade Blackmore)

- 1863年1月7日 カナダ・ノヴァスコシア州ツルロ近くのオンスローに生れる
- 1889年 ツルロ師範学校卒業。東洋英和女学校の教員となる。
その後、東洋英和に在職の間、
1890～1891年(第3代)・1896～1900年(第7代)・1904～1912年(第10代)
・1922～1925年(第14代)と4回校長を務める
- 1891年 山梨英和女学校第2代校長に就任(～'94年)
- 1918年 東京女子大学理事長に就任(～'25年)
- 1925年 東洋英和の校長を辞し、カナダへ帰国。
- 1942年1月2日 逝去
- この他、カナダ・メソジスト婦人伝道会日本総理(1895～1923)を務めながら、永坂孤女院設立、興望館セツルメント、日本基督教婦人矯風会活動などの社会事業に尽力した。

ロジャース先生が本文にてご紹介くださったミス・ブラックモアゆかりの布は、先生がカナダへご帰国される際に学院へ贈られ、現在は史料室に保存されています。

〈資料紹介〉10 片山廣子の本

史料室所蔵の「片山廣子／松村みね子の本」より、次の4冊をご紹介します。

翻訳作品より—『かなしき女王』・『カッパのクー』

東 夏 子

『かなしき女王』

初版の第一頁には、
「フィオナ・マクラオド
短篇集 譯者 松村みね
子」とあり、奥付けには
「大正十四年三月十五日
第一刷發行 譯者 片山
廣子」と書いてある。前
者は筆名、後者は本名で
ある。—(同書解説より)—



この本は1989年に沖積舎から新しく出たもので、副題を「ケルト幻想作品集」というフィオナ・マクラオドの短編集である。

フィオナ・マクラオドという女性名は筆名であり、本名をウィリアム・シャープ (1855-1905) というスコットランド出身の男性作家である。当時ダブリンでは、イエーツやダグラス・ハイドたちがアイルランド文芸復興運動を推進させていた。ウィリアム・シャープも同じようにスコットランドのケルト文芸復興を志していたが、彼は病身であり、実際に復興活動することはむずかしく、女性名を名乗って『滅びゆく幻の民スコティッシュ・ケルトの哀しい『白鳥の歌』』を高らかに歌ったのだ、と解説にある。

この本は「海豹」「女王スカファアの笑ひ」「最後の晩餐」「髪あかきダフウト」「魚と蠅の祝日」「漁師」「精」「約束」「琴」「浅瀬に洗ふ女」「剣のうた」「かなしき女王」の12編の短編から成り、男女の愛と憎しみと哀しみと死、戦いと流れる血、人間と異形の者、古代キリスト教と異教の戦い、むせ返る血と愛の物語である。激しい、だが静かな、不思議な魅力にあふれる物語集である。

『カッパのクー』

片山廣子が翻訳し、岩波少年文庫から1952(昭和27)年に出たこの本はアイルランド伝説集として、様々な小さな物語がのっている。この中には詩人イエーツを指導者とするアイルランド文芸復興運動の仲間であるオケリーが書いた唯一の少年読み物として残された「レップラカン」の話が含まれている。

表題作である「カッパのクー」のカッパは実はアイルランドの^{カッパ}人魚である。荒海ぞいの土地では珍しいものではないそうである。男の^{カッパ}人魚はみどりの歯とみどりの髪、ブタのような目と赤い鼻をもっている。女の^{カッパ}人魚は魚のような尾で、指の間にはガチョウのような小さな水かきがあり、それでも美しい姿である。片山廣子はこの^{カッパ}人魚を、日本の人魚にはあまり男がないこと、そして日本には昔から河童の話はたくさんあるので、足としゃぼん姿はだいが違いますが、耳なれない男の^{カッパ}人魚の話よりはということ、^{カッパ}人魚を河童とおきかえて訳している。

5番目の物語の「レップラカン物語」は、金の壺をめぐる人間とレップラカンという小びとの知恵比べであり、この物語集の中で最も長い話である。

この本にある5つの物語には^{カッパ}人魚・長生きのおばあちゃん(それはそれはとてつもなく長生きである!)・大男・聖者やけものたち・それに小びとが登場している。だがアイルランドの伝説で一番かんじんなのは妖精であり、大男も小びとも^{カッパ}人魚もみな妖精の親類であるから、「すべてを^{カッパ}妖精物語として読んで下さればうれしいと思います。」と片山廣子はあとがきで述べている。

妖精が「一ばんたくさんいた」という、アイルランドの雰囲気^{カッパ}が伝わる魅力的な物語集である。

(小学部教諭・史料室委員)



近年刊行された本より『燈火節』・『野に住みて』

保坂綾子

近年、片山廣子（松村みね子）の著作集が月曜社より相次いで刊行された。『燈火節』（2004年刊）と『野に住みて』（2006年刊）である。この2冊に彼女の翻訳以外の作品が網羅されている。

『燈火節』には、1953年に暮しの手帖社から刊行された廣子唯一の随筆集『燈火節』（第3回日本エッセイスト・クラブ賞受賞作品）の全編をはじめ、小説や童話、初期文集など散文作品が収録されている。目次をみると、「或る国のこよみ」「豚肉 桃 りんご」「大へび小へび」「花屋の窓」「乾あんず」「軽井沢の夏と秋」等々、ついページを開いてみたくなるようなタイトルが目飛び込んでくる。一方、廣子の晩年に出された歌集より表題をとった『野に住みて』には、発表された廣子の短歌すべてが掲載されている。加えて、資料編として「インタビュー」「短歌評」「訳者あとがき」「同時代人の回想」なども収録されており、非常に読み応えある作品集に仕上がっている。両書はともに解題、年譜、書誌、解説などが充実していて、片山廣子の作品と人間像を知るには欠かせない本となっている。

この2冊が世に出たおかげで、現在ではとても入手困難な廣子の作品の数々を容易に読むことができるようになった。例えば、『燈火節』には東洋英和に関する作品がいくつか収録されている。第2代校長のミセス・ラージとその家族が暴漢におそわれた

事件（1890年）を話題にした「L氏殺人事件」や廣子の女学校生活の一端にふれた「身についたもの」（ともに前出暮しの手帖社刊『燈火節』所収）、「学校を卒業した時分」（「婦人サロン」第3巻第4号掲載文）などの随筆、第4代校長のことを書いた「ミス・マンローのこと」（『東洋英和女学校五十年史』初出）などである。また、『野に住みて』には、廣子の第一歌集『翡翠』が再録されていて必見である。

『燈火節』・『野に住みて』は学院史料室の他、中高部図書室、大学図書館にもそれぞれ所蔵されている。是非一度、手に取っていただければと思う。



『燈火節』



『野に住みて』

（史料室・史料室委員）

東洋英和女学院史料室所蔵「片山廣子／松村みね子の本」

	表題	著者・編者	発行	発行年月日
著作	翡翠	片山廣子	竹柏会出版部	1916(大5).3
	燈火節	片山廣子	暮しの手帖社	1953(昭28).6.15
	燈火節	片山廣子／松村みね子	月曜社	2004(平16).11.30
	野に住みて	片山廣子／松村みね子	月曜社	2006(平18).4.30
翻訳	シング戯曲全集	ジョン・M・シング	新潮社	1923(大12).7.27
	かなしき女王(フィオナ・マクラオド短編集)	フィオナ・マクラオド	第一書房	1925(大14).3.15
	近代劇全集 第25巻 愛蘭土篇	イエーツ／シング／ダンセニ	第一書房	1927(昭2).11.10
	世界戯曲全集 第9巻 愛蘭劇集	イエーツ／グレゴリー夫人／シング他	世界戯曲全集刊行会	1928(昭3).9.8
	カッパのクー(岩波少年文庫44)	オケリー 他	岩波書店	1962(昭37).2.10第19版
	鷹の井戸(角川文庫 リバイバルコレクション)	イエーツ	角川書店	1989(平元).11.25再版
	かなしき女王(ケルト幻想作品集)	フィオナ・マクラオド	沖積舎	1989(平元).9.1
	ダンセイニ戯曲集	ロード・ダンセイニ	沖積舎	1991(平成3).11.30
	シング戯曲全集	ジョン・M・シング	沖積舎	2000(平12).11.10
	執筆文掲載	竹菰園集 第一編	佐佐木信綱編	博文館
竹菰園集 第二編		佐佐木信綱編	博文館	1902(明35).5.27
東洋英和女学校五十年史			東洋英和女学校	1934(昭9).12.9

おもな寄贈資料

- * 『外崎長三郎八十八年のあゆみ』
- * 『野に住みて』(月曜社)
- * 校章入りWriting Pad 3種／えんじ色のリボン(高女科在校時使用のもの)／1956年4月15日付朝日新聞きりぬき(ミス・ハミルトン関係記事)／東洋英和女学校基本金募集の案内(1940年12月付)他。
- * 『世論事報』第39巻2号～第5号(村岡花子関係記事掲載)／"Your Island Guide 2006 Prince Edward Island"／『赤毛のアン』を日本にはじめて紹介した 村岡花子)他
- * 『増訂三ぼう主義』(大江スミ著)／『ひとひらの雪として』(大江スミ先生の生涯)／ビデオ「大江スミ先生の生涯」
- * 『言葉が招く国際摩擦』(鳥飼玖美子著)
- * 1969年創立85周年記念運動会関係資料
- * 『サティア<あるがまま>』第20号(井上敬関係)／『ショートヒストリー東洋大学』／『図録 東洋大学100年』 他
- * 絵画2点；「各時代の制服姿の生徒(2004年作)」他。
- * 1945(昭和20)年3月27日付の卒業証書／郵便貯金通帳 ほか
- * 「四十年目の出流山訪問」(コピー)
- * 『開館十周年記念展 I やまなし・女性の文学』
- * 第14回社会科学習旅行のしおりと資料
- * 東洋英和女学院短期大学名簿・東洋英和女学院大学教職員名簿 計40冊、1995年度一般職員研修会(於追分寮)のしおり 他
- * 『サワコの和』幻冬舎文庫(阿川佐和子著)
- * 柳原白蓮および飯塚市関係資料：2006年8月13日付朝日新聞記事(柳原白蓮関連)／絵葉書「旧伊藤邸の保存を願って」 他
- * 『新島研究』第97号／『同志社叢書』第26集／『宣教師の勇者 デヴィスの生涯』
- * 『研究叢書第6号 大学アーカイヴズのこれから』／『大学アーカイヴズ』No.34
- * 『関西学院史紀要』第12号
- * 『法政大学大学史資料集』第26集・第27集／「法政大学大学編纂室ニュース」準備号
- * 「福澤研究センター通信」第4号
- * 『武蔵学園史年報』 第11号
- * 『成蹊学園史料館資料集』②学園各学校の日誌・日記等／『成蹊学園史料館年報』2005年度

- * 駒大史ブックレット5『「図書館誌」にみる駒大図書館史』【その1】／『考古資料展1「日本・中国の古瓦」図録；駒澤大学禅文化歴史博物館所蔵の古瓦』
- * 『明治大学史資料センター事務室報告』第二十七集／『大学史紀要』第10号 尾佐竹猛研究Ⅱ
- * 『京都大学大学文書館研究紀要』第4号／「京都大学大学文書館だより」No.10／『京都大学の歴史』(歴史展示室常設展図録)／『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』第1巻・第2巻
- * 『東北大学史料館紀要』創刊号
- * 『東北大学百年史編纂室ニュース』第12号
- * 『武蔵野美術大学年報』2002-2004／『武蔵野美術大学短期大学部47年の系譜』
- * 『九州大学大学史資料叢書』第14輯／「九州大学大学史料館ニュース」第26・第27号
- * 『西南学院史紀要』vol.1
- * 『広島大学文書館紀要』第8号
- * 「全国大学史資料協議会西日本部会会報」No.20
- * 『創価教育研究』第5号
- * 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』No.8
- * 『校史』vol.18 (國學院大學)
- * 『あゆみ』No.57(フェリス女学院史料室)
- * 『立教学院史研究』第4号
- * 『南山学園資料集2 名古屋聖霊学園資料集第一編』

おもな購入資料

- * HELEN WADDELL'S Writings from Japan by David Burleigh(RISH ACADEMIC PRESS, 2005.)
- * 『野に住みて』(月曜社)片山慶子／松村みね子著
- * 『全訳 アンノ楽しい家庭』(モンゴメリ)／『王子と乞食』(マーク・トウェーン)…共に村岡花子訳
- * 『赤い靴はいてた女の子』(菊地寛)…佐野きみ関係
- * 『ハル・ライシャワー』(上坂冬子)…牛場田鶴子関係

<お詫びと訂正>

No.66の8頁左側『愛は決して滅びない』の著者依田和子様の卒業年'54は'53の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。なお同書は依田直也氏との共著であることを添えさせていただきます。